平成１９年度学力向上拠点形成事業

研究紀要

研究主題

「かかわり合う活動を通して、自己を拓き、豊かに表現できる子どもの育成」

～ 教科の確かな力を伸ばし、
学びの資質・能力を高めながら ～

大イチョウとフッペルのある学校

日南町立日野上小学校

平成19年12月７日（金）

〒689-5214 鳥取県日野郡日南町三栄1091
TEL(0859)82-0309 FAX(0859)82-1602
HP URL http://www.torikyo.ed.jp/hinokami-s
E-mail hinokami-e@mailk.torikyo.ed.jp

日 程 ・ 会 場 図

1　日　　程　　平成１９年１２月７日（金）

12:40　13:15　14:15　15:20
13:00　13:20　14:05　15:10　16:45

受付	研究概要説明	公開授業	移動	部会協議（低・中・高）	移動	全体会 講演会

2　公開授業　　１３：２０　～　１４：０５

学年	単　元　名	指　導　者
１年	ものとひとのかず	木村　朋子　・　大田　澄江
４年	もとの数はいくつ	河上　英仁　・　中島　昭生
５年	同じものに目をつけて	惠比奈宏志

3　分科会　【 会場：低学年…１年教室、中学年…４年教室、高学年…５年教室 】

4　全体会　【 会場：音楽室 】

① 開会あいさつ

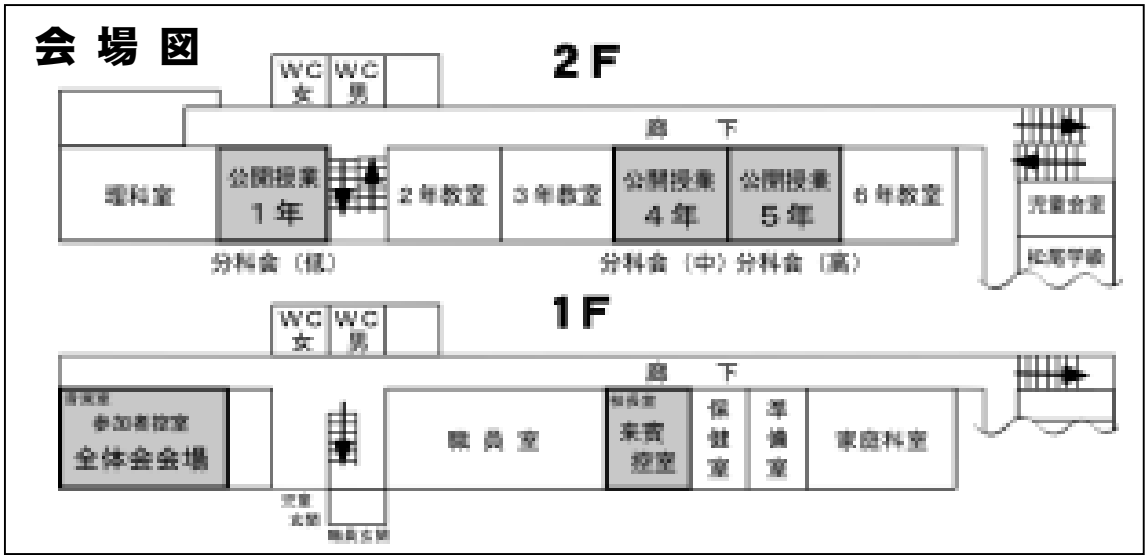
② 学校長あいさつ　　日野上小学校校長　　青戸 晶彦

③本校の研究について　　日野上小学校研究主任　　中島 昭生

④　講　演

講師：	鳥 取 大 学 教 授　矢部敏昭先生
演題：	「授業の質を高める算数授業の創造」 －　新学習指導要領を見通して　－

⑤ 閉会あいさつ



1　校内の研究と経過

（1）研究について

① 研究主題及び研究主題設定の理由

○ 主　題

「かかわり合う活動を通して、自己を拓き、豊かに表現できる子どもの育成」
～ 教科の確かな力を伸ばし、学びの資質・能力を高めながら ～

○　主題設定の理由

今日、わが国は科学技術の発達の恩恵を受け、世界でもトップレベルの豊かな国となっている。アジアの奇跡とまで言われたこの発展を可能にしたのは、真面目で好奇心にあふれ、こつこつと努力する日本人の国民性とともに、国家プロジェクトとして早くから学校制度を充実させ、一定水準の教育レベルを保障してきた教育システムがベースになっていることは間違いないであろう。国民を豊かにしてきた経済発展は、同時に情報化を押し進め、数年前の出来事が古くさく感じられるくらい急激に変化する社会を作り上げてきた。このような激しい変化の中で、かつての経済発展を支えてきた教育システムの限界がみられるようになってきている。2004 年に発表されたＯＥＣＤの学習到達度調査(PISA)の結果では、「数学リテラシー」「読解力」の項目で落ち込みが激しく、「学力低下論」に火をつけた。その多くは「ゆとり教育」を批判し、基礎基本の徹底を求めるものだったが、単にそこだけに目を奪われてしまうと本質を見誤るおそれがある。もちろん、基礎基本の習得は大切であるが、それはあくまで「学び」の一要素に過ぎない。現在のようにあふれる情報の中で、激しく変化する社会で主体的に生きていくためには、基礎基本を基盤にしながら、自らの目的に向かって知を再構築する力、すなわち「生きて働く知恵」を育てていく必要があるものと考えられる。そのような視点で本校の児童を見てみると、素直で人なつこい良さを持ちながらも、自分で道を切り開き、困難を乗り越えてやり通そうとする力、友達と協同しながら物事に取り組んでいく力が弱い実態がある。

本校は、平成 15 年度から 2 年間「学力向上フロンティア事業」の指定を受け、算数科を先導教科として研究を進めた。平成 17 年度からは、学力向上拠点形成事業の指定を受け、算数科の研究を継続すると共に、国語科の説明文領域に焦点を当てて研究を進めてきている。これらの取り組みを通して、算数科においては問題開発、単元構成の工夫、TT などを中心に授業改善を進め数学的思考力及び算数的表現力の育成を図った。また、国語科においては指導の重点を明確にした一覧表及び言語事項の系統表の作成、ブックリストの作成、音読の重視、キーワードに着目して読み取る学習方法の工夫改善などを通して「確かな読みの力」を育てる取り組みを行ってきた。また、両教科ともかかわり合う活動を意図的に取り入れ、人とのかかわりの中で学習内容をとらえ直す活動を重視してきた。そのような教科での取り組みに加え、裁量時間を活用した基礎基本の習熟、表現力育成を図る場を設定し、一定の成果をあげてきている。しかし、「ねらいに効果的に迫るための課題設定の仕方」、「かかわりの質の高め方」、「基礎基本のさらなる定着」、「表現力の系統的な指導」などの課題も残されている。これらの課題に迫るために、本年度は、教科学習と生活とのつながりを意識し、より地に足のついた研究に発展させていく必要があると考える。

本校の研究主題の『かかわり合う活動』とは、思いを交わす活動である。人は人とのかか

わりの中で人として成長していく。自分の考えを人に伝えようとするだけで、思考は活性化するものである。そのような活動が学習の中で習得した内容をより確かなものにして行くに違いない。また、「かかわり合い」は今の自分に負荷を与える行為である。かかわり合いの中で自分の内面と向き合い、自分の可能性に気づき、その中で得られた達成感や成就感が自信や意欲を育んでいくと考える。このような内面的な変化が「自己を拓く」事であり、そこで培われた自信や意欲を背景に思いを豊かに伝えていく「豊かな表現」につながるものと考える。また、この主題を支えるのは、教科の中で培われる「確かな力」である。教科で培った力を生活場面に生かし、生活場面から浮かび上がる課題を教科の中にフィードバックさせて日々取り組むことで、より深く本研究で目指す児童の姿に迫ることができるものと考える。

②　主題に迫るために（仮説及び取り組みの概要）

上記の主題に迫るために、次の仮説を立てて研究に取り組んだ。

（研究仮説）

かかわり合う活動を学習や生活場面に位置づけ、相手意識や話し方、根拠性に留意させながら表現する活動を取り入れていけば、表現上の工夫や思考力の伸びを促し、さらに豊かな表現力を身につけることができるであろう。

（国語部研究仮説）

少人数での話し合い活動を学習に位置づけ、自分の思いを根拠をもとに話し合う経験を積み重ねていけば、互いの表現のよさに気づきながら表現力を伸ばし、大きい集団になっても、自信を持って話したり、学習活動に参加したりできるであろう。

（算数部研究仮説）

さまざまな形態のかかわり合う活動を学習過程の中に位置づけ、既習事項や算数的表現を活用しながら思考過程を筋道立てて説明し、相手を納得させることができれば、相互の数学的な考え方は深まり、さらに新たな課題解決に向けての意欲が高まるであろう。

○ 拠点形成事業の重点とは

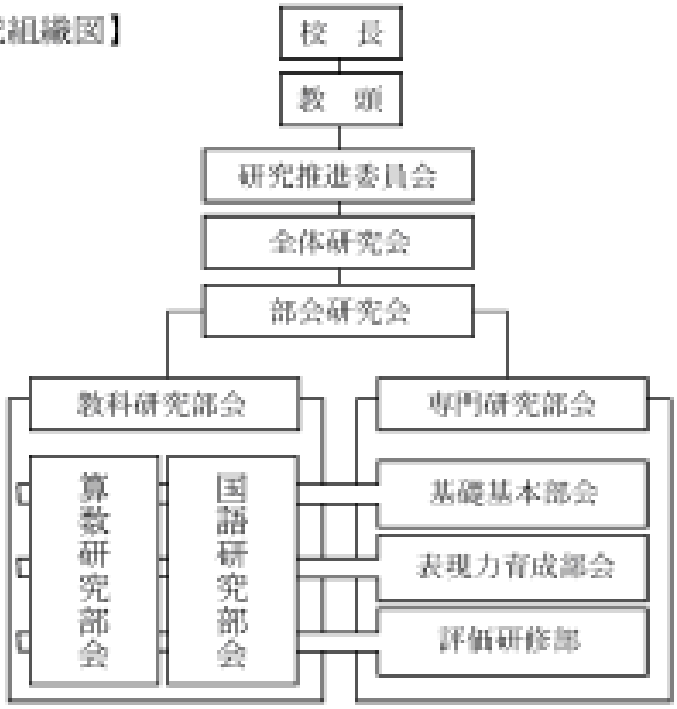
拠点形成事業の意義を以下にまとめた。

・地域の実情や課題に即した「確かな学力」の育成のための実践研究を実施し，その成果の普及を図ること。
・「確かな学力」とは、知識や技能に加え自ら学ぶ意欲や思考力，判断力，表現力などである。
・実践や研究が一部の教員の取組に終わったり、熱心に取り組んだ教員限り、その学校限り、指定期間限りで終わったりするようなことの無いように組織的・計画的な取組にする。
・成果発表会、研修会等の開催、実践事例集の作成、インターネットによる情報提供などを通して、成果を内部にとどめず広がりと深まりのある取組にする。
・児童の意識や学力の変容、教師・保護者の意識の変容、経年比較が可能なデータを基にして成果の検証を行う。

③　研究組織

研究組織及び各組織の構成員と主な研究内容

【研究組織図】



【各部の構成員及び研究内容】

組織名		構成員	主な研究内容
研究推進委員会		校長、教頭、 中島、大田、木村、三上	・研究の方向性の検討 ・提案事項の検討
全体研究会		全職員	・理論研究　・授業研究 ・提案内容の検討，共通理解 ・各種研修　・情報交流
教科研究部	国語研究部会	○三上、○三森、坪倉、 持本、松尾、（中島）	・研究主題との整合性のとれた授業実践 ・授業事前研の開催（柱の設定） ・学習で身に付けた力が生活に生かされることを目指し、基礎・基本の力、かかわり合いの力、表現力を育成する学習の工夫改善を行う。 ・部の研究にかかわる評価活動を行う。 ・ICTの活用を意識した実践に取り組む。
	算数研究部会	○木村、校長、河上、 恵比奈、大田、中島	
専門研究部	基礎基本部会	○河上、三森、坪倉、 恵比奈、入澤	・学習を支える基礎的・基本的な力を身に付けさせる計画立案・環境作り・評価を行う。 （学習規律・整頓の確立、いちょうタイム、基礎取り組み会の充実、読書活動の充実、生活リズムの確立）
	表現力育成部会	○大田、木村、三上、 持本、校長	・表現力を発揮する場の設定と内容の工夫、学習で培った表現力が生活に生かされているかを評価・検討し、改善策を提案する。（発表集会・詩・歌・学習中の表現活動の充実）
	評価・研修部会	○松尾、中島 （木村、三上）	・校内研修の充実を図る ・研究の成果を立証するデータ収集・分析を行う （校内研修の準備・運営、研究全般にかかわるアンケートの実施・分析・評価及び平立て）

④　研究の経過

本事業にかかわる、本校の研究の経過を以下にまとめる。

平成 15 年度
文部科学省指定「学力向上フロンティアスクール事業」の指定を受け算数科を先導教科として研究を進める。

↓

平成 16 年度
文部科学省指定「学力向上フロンティアスクール事業」２年次
・教科の指導力向上講座授業研究会と併せて本校で研究成果を発表する。

↓

平成 17 年度
文部科学省指定「学力向上拠点形成事業」の指定を受ける。＜１年次＞
（主な取り組み）
・文章問題の問題把握に課題が見られたことから、全ての教科の基礎となる国語科の重要性を再認識し、算数科に加え国語科を先導教科として加える。
・国語科においては、的確な読み取りや論理的思考力、表現力の育成を重視し、説明文教材に絞って研究を深めることとした。

↓

平成 18 年度
文部科学省指定「学力向上拠点形成事業」＜２年次＞
（主な取り組み）
・研究主題をとらえ直し、３つのキーワードを明確に意識づける取り組みを行う。
・研究組織を再編し、「基礎基本部」「表現力育成部」「評価・研修部」の３組織とする。
・先導教科「国語科・算数科」の取り組みを共通理解するため交流授業研究会を持つ。
・校内研究、授業研究の形態を工夫し、小グループ研修・ワークショップ型研修を多く位置づける。

↓

平成 19 年度
文部科学省指定「学力向上拠点形成事業」＜３年次＞
（主な取り組み）
・３つのキーワードを意識しながら実践を進める。
・研究の日常化を推進するため。「実施したカリキュラム」の作成、「自主的な授業公開」の推進、「感想ノート」の活用などを行う。
・「成果を内部にとどめず広がりと深まりのある取り組みにする」という拠点形成事業の主旨に基づき、研究の概要をリーフレットにまとめ、成果発表会を実施する。
　○　算数科成果発表会…平成１９年１２月７日（金）
　○　国語科成果発表会…平成２０年　２月７日（木）

（2）研究のキーワードについて

本校の研究主題には、本校の研究推進を支える３つのキーワードが盛り込まれている。その３つとは、「かかわり合い」「自己を拓く」「豊かな表現」である。それぞれのキーワードについて、次に説明を加えたい。

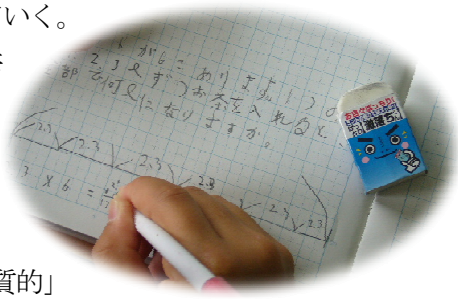
① 「かかわり合い」

本校の児童に最も必要だと考えたのは、「かかわり合い」である。かかわり合いについては、『教材とのかかわり』・『友達とのかかわり』・『日常とのかかわり』が考えられる。その中でも本校では『友だちとのかかわり』を最も重視している。従来の学習が「教師対児童」という構図からなかなか抜け出せず、教師の意図にそった発言ができる児童の意見をつなぐものになっていることへの問題意識が背景にあった。今の学習形態を大きく変えていくことには無理があるが、学びの場を教師主導型から、少しずつでも児童相互の学び合いの場へと変えていくことが必要である。そのような学習場面が保障されれば、必然的に相手意識が生まれ、根拠を持った対話を交わす中で、学びはより豊かで確かなものになるであろう。

② 「自己を拓く」

「自己を拓く」とは、自分の可能性に気づき、自分に自信を持つことであると考える。この自信を独りよがりのものではなく確固としたものにするためには、他者とのかかわりの中で自己を表現していく必要がある。そのため、本校では友だちとのかかわり合いの場を設定し、自分らしい考えを自由に表現したり、他者の考えのよさに触れたりすることができるようにしている。

まず、課題に対してしっかり向き合い自分の考えをはっきりさせていく。そして、少人数グループの中で自分なりの根拠を持った考えを伝え合い、友だちの考えを聴き合う活動を行う。さらに少人数の場で自信を深めた考えを全体の話し合いの場で出し合い、考えを練り合う中で、自分なりの考え方のよさ、友だちの考えの素晴らしさを感じ取っていく。このような活動を通して自分の良さ、友だちの考えの良さ、共に学ぶ充実感を味わうことで自尊感情が育まれ、学び続けていこうとする意欲がより確かなものになると考える。



③ 「豊かな表現」

「豊かさ」とは何であろう。「量的」な豊かさもあれば、「質的」な豊かさもある。本校では、量的な豊かさも含めながら最終的には表現の質が豊かになっていくことを目指している。

「質的な豊かさ」には次のようなものがあると考えられる。

『論旨を的確に表現できる構成』・『効果的な表現方法の選択』・『適切な用語の選択、活用』

これらの豊かな表現を生み出すためには、表現に対する動機付けと評価の視点が大切である。自分の考えをよりよく表現したい、しっかり伝えたい、相手の納得する顔が見たい。そのような相手意識を生み出すためにも、表現活動の場面にも「かかわり合い」が有効な手だてであると考える。このようなかかわり合いをベースにして培われた力は、具体的な体験活動から得られる力であり、その後の学習の中でも生きて働く力として児童の表現活動を支えるものとなると考える。

（3）研究の背景

① 脳科学の見地から

近年、脳科学の研究成果が報告されることが多くなった。その中でよく取り上げられたのが、前頭葉の活性化である。100 マス計算と前頭葉の活性化、認知症患者の脳の活性化による症状の改善など脳の活性化と学習との関連を示すデータはいくつか紹介されているが、そのなかに「対面」することで脳は活性化するという研究結果がある。例え同じ事をするにしても、「対面」を意識したり、実際に相手と向き合ったりするだけで、そうではない場合に比べて脳は活発に働く。同じ対面でも相手がテレビやゲームだと脳は活性化しないのに、相手が生身の人間の場合、脳は活性化する。これを学習場面に置きかえてみると、課題に対して自分の考えを例え持ったにしてもそこに相手意識が入るかどうかでその子の思考の広がりや深まりが変わってくると言うことである。学習の中に対面の場面を作る本校の「かかわり合う活動」もその効果をねらっている。

② 認知心理学の見地から（人はいかに理解するか）

認知心理学では、既有の知識体系のことを「スキーマ（schema）」と呼んでいる。人は知識を頭から記憶するのではなく、既に持っている知識体系とのつながりを見出しながら、その中に組み込んでいくという考えである。これは、我々がふだん行っている問題解決学習の「既習事項」と「本時の課題」との間にも同じ構図を見ることができ大変興味深い。新しい知識を単に記憶させるのではなく、知識体系の中に組み込んでいくためには、問題解決のプロセスを通して、既得の知識とのつながりを考えさせながら身につけさせていく必要がある。

当然、このスキーマは個々がその体験を背景としながら身につけているものなので、個人差がある。学級の中の児童のスキーマは様々であるため、個への支援が必要になってくるが、限られた時間の中で個に応じる機会はかなり制約されている。また、短時間で個に応じようとすればするほど教師が効率的な指導を行うため、どうしても教師主導になりがちである。

「分かる前提は個々で異なっている」「わかり方も個々で異なっている」ということをふまえて考えるならば、一斉指導の限界は明らかである。

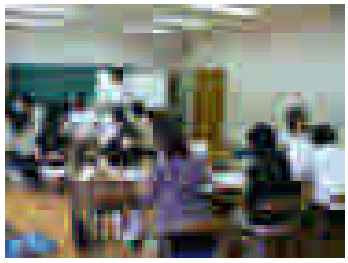
③ PISA 調査が示すもの

PISA 調査の結果を見たとき、一番驚いたのはその順位云々よりも「無答」の多さであった。「無答」が意味するものは、日本の子ども達の学力が「確かな学力」ではなかったことである。ある条件下でしか発揮できない力は「確かな力」では無い。壁を前にして立ち止まるのではなく、何とかして乗り越えよう、打開策を考えようとする力を日本の教育は身につけさせて来なかったのではないだろうか。PISA の結果をふまえ、学習の姿をどのように変えていくかを考えたとき、「自分らしい考えを持つ力」、「根拠を持って考える力」、「熱意を持って伝えようとする力」を身につけさせていく必要があることを強く感じた。本校の研究は PISA 調査の結果を受けて始まったものではないが、これからの教育の姿を求めるとき、PISA が示した教訓は本校の目指す研究と同じ方向を示していることを実感し、志を強くした。

上のような学力形成にかかわる事項を具体的な学習場面に位置づけるため、本校では「かかわり合い」場面をつくり、その中で根拠を示しながら表現する活動を重視してきた。

（4）研究の日常化のために

① 校内研究の充実



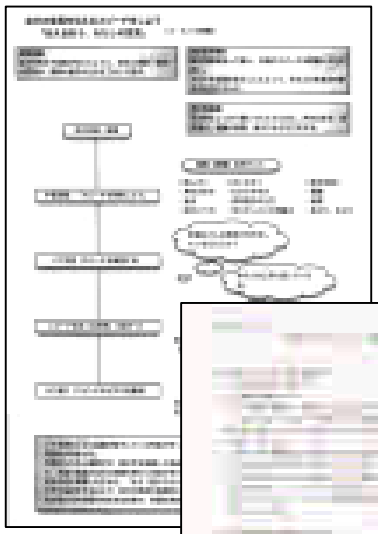
研究を力強く進めるためには、校内研究の充実が欠かせない。本校でも初年度は全職員が一同に会して話し合うことが多かったが、限られた者に発言が偏るなどの課題がみられた。そこで、２年次からは必要に応じて小グループで話し合う機会を増やしていった。特に授業研究会では小グループ協議を積極的に取り入れ、活発に意見が交わされるようになった。

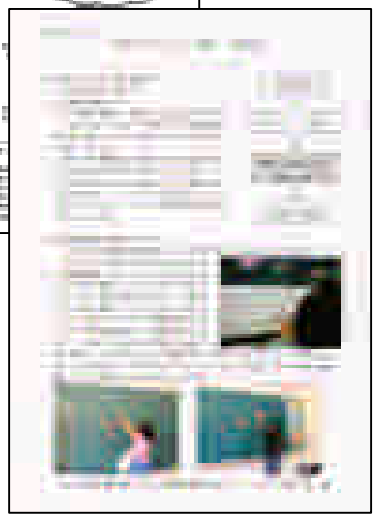
校内研究については、専門部会の１つである評価・研修部が中心になって企画・運営をおこなったので、そちらのまとめを参照していただきたい。（本資料　P34～）

② 公開学習の推進（感想ノートへの記入）

年間数回の授業研究会は貴重な研究の機会だが、それだけに特化して研究が深まるものではない。普段の授業の中にも授業改善の様々なヒントが秘められている。そこで、公開できる時間を教務が取りまとめ、右のような一覧にした。実際に参観できるときばかりではないが、教師自身も相手意識を持って取り組むことで互いに学び会う機会を持つことができた。また、ただ参観するだけではなく参観者の気づきを授業者に返していくために、各学級に「公開学習感想ノート」を配置した。このような取り組みは、継続することに意味があるので、あまり無理をしないように、できるだけ普段着の取り組みで実施するようにした。行事等で実施できないこともあったが、研究を日常化するための大切な取り組みの１つになった。

③ 実施したカリキュラムの作成





研究を日常化する一環として、研究主題に沿った取り組みや教科指導のあり方にこだわって行った実践を月に２回程度実施し、記録を残していくことにした。授業者は授業の構想を持って授業を行うが、予定通りに学習が展開されることはまれで、多くの場合事前に考えたカリキュラム（意図したカリキュラム）は変更を余儀なくされる。しかし、それで授業が失敗というわけではなく、児童の反応や思考の流れを総合的に判断しながら変更を加え本時のねらいを達成するために学習を展開するのである。このように意図したカリキュラムを背景にしながら、実際に行った授業（実施したカリキュラム）が生み出されるわけであるが、（意図したカリキュラム）と（実施したカリキュラム）の対比から様々な授業改善のポイントが見えてきた。

④　研究通信の発行

研究の意義を確認し、取り組みの主旨をより深く理解してもらうために、研究通信を発行した。また、この通信では、本校の研究だけに限らず、学力という視点で最近話題になっていることがらも取り扱い、研究推進を啓発する手だてとして活用した。

研究通信で扱った話題は、主に次のものである。

・学力向上拠点形成事業について
・PISA 型読解力について
・交流授業研について

いずれも、本校の研究の基盤となる事柄ではあるが、割り当てられた校内研修の時間だけでは十分話し合うことができないので、通信という形で発行し、現在の学力観のとらえ方や、研究の目指す方向性を理解してもらう一つの側面として発行してきた。

研究通信 No. 2

PISAって何?

（5）成果と課題

◇　成　果　◇

【児童の変容】

・研究を始めた当初に比べ、子ども達のかかわり合う姿が自然なものになってきた。評価研修部のまとめからも、かかわることへの抵抗感が減り、自信を持って表現する児童が増えてきたことがわかる。
・主体的にかかわる場を設けることで児童に一定の緊張感が生まれ、学習規律の定着にも良い影響を与えていると考えられる。

【研究実践の日常化】

・日常的な実践は行事等の関係で難しいときもあったが、無理のない範囲で取り組んできた。この取り組みは、研究の基盤を確かなものにするために有効であった。

【見えてきた授業改善の方向性】

・まだまだ教師主導の授業形態から抜けきれない面もあるが、かかわり合い活動に求める姿をとらえ直す（自分なりの根拠を持った自由な意見交流の場とする）ことによって個々の児童の主体性を生かしながら学習を構成していく方向性が見えてきた。

◇　課　題　◇

【更なる授業改善の必要性】

・学習を深めるために「考え」「話し合う」価値のある課題作りが必要である。
・練り上げの効率化のためには、議論の場を絞る必要がある。自力解決の場面で個々の児童の達成状況を見とり、何に焦点を当てて話し合えばよいか教師が的確に判断していく必要がある。

算数部会の取り組み

１　はじめに

算数部では、本校の研究主題および研究仮説を受けて、算数科における具体的な研究仮説を「さまざまな形態のかかわり合う活動を学習過程の中に位置づけ、既習事項や算数的表現を活用しながら思考過程を筋道立てて説明し、自他共に共有し合えるならば、相互の数学的な考えは深まり、さらに新たな課題解決に向けての意欲が高まるであろう。」と設定した。そして、研究テーマの実践に向けて、また、日々の授業を改善していくために、どのように授業を構成し、展開していけばよいのか算数部会で話し合った。

研究主題における三つの視点「かかわり合う活動」「自己を拓く」「豊かな表現」を学習過程の中のどこに位置づけるのか計画を立てて授業を構成し、その授業構成を実際に展開できたのか、その展開によって、どのような力が子どもたちに身についたのか、常に振り返ることによって、よりよい授業をめざして実践を積み重ね、授業改善に努めることとした。

○研究主題に即した授業構成とその展開のあり方
○実施したカリキュラムの作成

２　取り組みの実際

（１）研究主題に即した授業構成とその展開のあり方

本校では児童の主体的な学習を促すために問題解決学習に取り組ませ、自ら課題を解決し、集団で練り合うことにより、共に学び合うよさや喜びを共有できる授業づくりをめざしている。

Ⅰ　問題の提示

＊視点１：かかわり合う活動①～問題とのかかわり～

・問題解決に主体的に取り組ませるために、問題を子どもたちと一緒に作っていく。問題を一緒に作ることによって、数量の関係に着目するようになり、見通しをもって問題解決に取り組めるようになると考える。

○課題の設定のしかた

・本時目標に対応させ、４５分後の子どもの姿をイメージする。
・子どもの実態から問題をつくる。
・算数の特性を生かす。（多様な解決ができる問題、一般化に向けた問題をつくる。既習を生かす。）

○算数的な課題は何か、その課題を解決するためにどのように考えればよいのか、見通しをもたせる。既習事項をもとにして考えられないか問いかけたり、答えを見積もらせたりする。

Ⅱ　問題解決

＊視点２：自己を拓く

・問題解決に取り組むとき、解決方法を友だちにわかりやすく伝えようと工夫したり、ひと通りの解決方法を見出した後、他の解決方法を見出したり、自ら確かめをしたりすることよって、集団での話し合いに主体的に臨もうとする姿が見られると考える。

＊視点３：豊かな表現

・課題をどうとらえ、既習事項を用いながらどのように解決を図ったのか、よりわかりやすく思考過程をまとめ、伝えられるようにしておく。相手意識を持って、算数的な表現（式、図、表、グラフなど）や算数的な活動を取り入れることによって、より洗練された表現につながると考えられる。

○いわゆる自力解決の段階である。解決の見通しをもとに課題解決を行う。問題に対する児童の反応を三つの様相に想定する。期待する算数的活動を想定する場合、量的ではなく、質的に高まるようにすることが大切である。より質の高い算数的活動に引き上げるためにはそれぞれの算数的活動に応じた教師の支援が必要である。

○自力解決における支援によって、より質の高い算数的活動に高めていく。教える側の教師が子どもの活動に価値を与えることによって、子どもたちはさらに主体的に問題解決に取り組むようになる。

Ⅲ　集団による話し合い

＊視点１：かかわり合う活動②～他の友だちとのかかわり～

・話し合い活動において、発表する側の子どもは自分の考えを根拠をもとにして説明できるようにさせる。聞き手にわかりやすく説明できるように、つなぎ言葉などを活用したり、具体的な場面を想定して話したりできる力も身につけさせたい。また、聞く側の子どもは自分の考えと対比させながら聞き、さらに説明を必要とするところ、付け加えるところ、考えの優れているところなどを発表する心構えを持って発表者の考えを受け止めさせる。話す側と聞く側のかかわり合いがもてることによって、みんなで考えを広げ、授業を創っていくという意識が育つと考えられる。

＊視点２：自己を拓く

・友だちの意見や考えに耳を傾け、「なぜ？」と疑問に思ったことを問いかけたり、自分の考えと違うところを見つけて発言したり、友だちの考えのよさを「いい考え！」と素直に認めたりする姿に「自己を拓く」具体的な姿をみることができると考えられる。

　また、友だちのよい考えにふれることによって、その考えをこれからの自分に生かせるようにノートに書き加えたり、大切なことを自分でまとめたりして、今の自分をもっと高めていこうとする姿やもっと価値の高い考えを身につけようと意欲的に学習に取り組む姿が見られるようになると考えられる。

＊視点３：豊かな表現

・問題解決の場面で見られた個々の算数的な表現（式、図、表、グラフなど）を練り上げの場面では一般化に向けてより洗練された表現へと高めていく。友だちのよりよい表現にふれることによって、自身の表現をよりよいものへと変えていこうとする姿が見られると考えられる。

○練り上げの段階である。練り上げでは、どの子どもも参加できることが前提である。どの活動にも価値があり、関連づけを図ることが大切である。そして、自力解決に施した支援を発問に変えることによって、すべての子どもに考えさせる場が設定できる。

○算数はみんなでよりよいものをつくっていく学習である。“新しい知の創造”の場である。

・低学年の場合など、自分のやっていることの価値に気づいていないことがあるので、教師がよさを見つけて認めていかなければならない。

○個は集団で高めていかなければならない。苦手な子どもは集団で高まるので、まず集団を高める必要がある。(苦手な子どもを応援していける子どもを育てる。)

・大事なことを友だちの意見を聞きながら書ける子どもを育てる。(主体的に書けるようにする。)そのためには、書く場を保障し、自分の意見に固執するのではなく、どんどんよい考えを取り入れられる子どもに育てる。

・また、発表している友だちに対して質問できる子どもに育てる。根拠に基づいた説明を行うことによってより洗練された算数的価値を身につけることができる。

Ⅳ　事象への活用

＊視点１：かかわり合う活動③～日常事象とのかかわり～

・学習を通して得た学びの成果を日常生活の具体的な場面で活用したり、適用題に用いたりすることによって、学ぶよさ、わかる喜びを味わうことができると考えられる。また、学ぶよさ、わかる喜びを味わうことによって、次なる学習への意欲付けが図られると考えられる。

○本時の学習を理解し、目標に到達できたかを評価する。

（２）実施したカリキュラムの作成

子どもたちにとって学ぶに値するよりよい授業づくりをめざして実践を積み重ねていく上で、日々の授業をどのように改善していけばいいのか、その具体的な取り組みとして今年度は実施したカリキュラムの作成を行うことにした。

（１）研究主題に即した授業構成とその展開のあり方の中で述べた通り、研究テーマの三つの視点

＊視点１：かかわり合う活動①～問題とのかかわり～
かかわり合う活動②～他の友だちとのかかわり～
かかわり合う活動③～日常事象とのかかわり～
＊視点２：自己を拓く
＊視点３：豊かな表現

に沿って、実施した授業を振り返り、授業を見直していくのである。授業の学習過程においてどの視点をどの段階で計画し授業を構成していくのか（「意図したカリキュラム」という）を考えて授業に臨み、意図した視点や事柄が実際の活動として展開できたかどうかを読み取り、視点ごとにまとめる（「実施したカリキュラム」という）ことによって、どのように授業を改善すればよりよいものになるのか考えていく手だてとした。

作成した実施したカリキュラムを基に、部会でそれぞれの実践について意見交換をし合い、授業改善に向けた研究の取り組み状況を確認し合った。

3　本年度の成果と課題

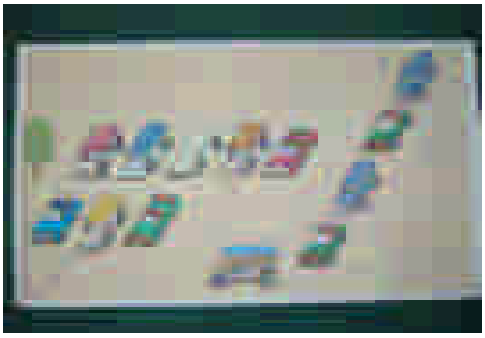
今まで取り組んできた授業実践をさらに深めるために、本校の研究主題に立ち返り、研究主題に即した授業構成とその展開のあり方について改めて部会内で検討し合った。

1）かかわり合う活動

かかわり合う活動を①問題とのかかわり、②他の友だちとのかかわり、③日常事象とのかかわりの三点からとらえ、学習過程のどこで、何を、どのように、「かかわり合う活動」として、どんな活動を期待するのか検討を行った。

①問題とのかかわりでは、子どもたちと一緒に問題を作ることを試みた。はじめは問題を作ること自体どういうことかわからなかった子どもたちが、問題を作るという経験を重ねることによって、前時の学習を生かして問題が作れるようになってきた。問題を作ることができるということは、文中の数量に着目し、数量間の関係を把握していることにつながるので、解決の見通しが図られる。また、自分たちで作った問題なので、主体的に解決を図ろうとすることができる。

「くるまが８だいとまっています。」　⟶



「そこへ５だいきました。」

↓

「あわせてなんだいですか。」

②他の友だちとのかかわりについては、今までにも練り上げの場面を中心に実践を重ねてきた。とはいえ、練り合いがなかなかうまく成立しないことがあり、その前段としてペア学習や少人数学習を取り入れ、お互いの思いを話したり聞いたりしてから全体の場での発表へと広げていった。ペア学習や少人数学習のあり方について一考を要するところはあるが、学習に参加するという意欲付けが図られてきた。全体の場での練り合いでは、自分たちでよりよい解決方法を見つけ、一般化に向けて高めていくことを子どもたちと共通理解して、子どもたちの考えをつないでいった。式、図、表、グラフなどを関連づけていくことによって思考を広げ、友だちの考えのよさにふれることによって、共に学ぶよさを共有することができた。

③日常事象とのかかわりでは、本時の学習を通して獲得した知識を日常事象に返すような授業展開を考えることによって、子どもたちが活用するよさを感じるようになった。学ぶよさやわかる喜びを感じることによって、自らが日常事象から問題を作ることもできるようになったり、次時の学習に向けて意欲的に取り組もうとする姿が見られるようになったりしてきた。活動の深まりと広がりのある評価問題をどのような問題にすればよいのか、今後も研究してい

かなければいけない。

2）自己を拓く

自己を拓くでは、学習過程のどこで、何を、どのように、「自己を拓く」姿として、どのような姿を期待するのか検討を行った。三つの視点の中で、授業中に子どもたちの姿としてとらえにくかった視点であること、学習過程の場面の中に設定しづらかったことがあり、部会でも、どのようにとらえればよいのか課題であった。研究授業を通して、「自己を拓く」姿について指導助言をいただいたことによって、具体的な「自己を拓く」姿に気づくことができた。子どもたちは、自分の思いや願いを自ら発しており、それを授業者が受け止めなければいけないと改めて感じさせられた。意欲的に学ぼうとする子どもたちを認め、さらには集団として高まっていこうとする子どもたちの変容を認め、子どもたちをほめて育てたいと考える。

3）豊かな表現

豊かな表現では、学習過程のどこで、何を、どのように、「豊かな表現」として、どのような表し方やかかわり方を期待するのか検討を行った。算数的な表現（式、図、表、グラフなど）を用い、一般化に向けてより洗練された表現へと高めていくことが大切である。日々の授業でもそのことを意識して指導に当たることによって、自分の考えを友だちにわかりやすく説明できるようにと、図に矢印を入れたり、大切な言葉を書き入れたり、「絵や図にかいたことを式に表せないかな。」と、自ら考えたりするようになった。子どもたちの発言の中には、たくさんの豊かな表現があるのにもかかわらず、授業者が気づいていないことがあったり、気づいていても板書しなかったりということがあるので、授業者が豊かな表現を見える形で子どもたちに返していくことが大切であると感じた。

実施したカリキュラムを作成するに当たっては、授業者のみならず参観者も含めて授業を振り返る機会が与えられ、改めて子どもたちの姿から学ぶことがたくさんあることに気づかされた。子どもたちの姿の中には、学びたいという思いがあること、友だちと一緒に学習することを楽しいと感じていること、などが表れていた。その子どもたちの思いに応えるために、私たち授業者はどのように授業を構成していけばいいのか考えられるようになってきた。「授業は、教師と子どもたちが一緒に創っていくものだ」ということを改めて感じることができた。教師自身の変容は、子どもや集団の変容に表れてくる。教師自身が、授業が楽しいと感じられるならば、子どもたちも同じように、算数の学習は楽しいと感じてくれることだろう。これからも、日々の授業を大切にし、学ぶ楽しさを子どもたちと一緒に作り出し共有していきたいと考える。

第１学年　　算数科学習指導案

平成１９年９月２１日（金）４校時

指導者　木村　朋子

大田　澄江

１　単元名　　『たしざん』

２　単元目標

①繰り上がりのある計算に興味を持ち、「10 の補数」という考えのよさに気づき、進んで計算の仕方を考えたり、進んで用いたりしようとする。（関心･意欲･態度）

②10 の補数を意識し加数や被加数を分解してたすことを考えることができる。（数学的な考え方）

③(１位数)＋(１位数)の繰り上がりのある計算を手際よくすることができる。また、適用題を解くことができる。（表現･処理）

④繰り上がりのある計算の仕方を用いられる場合を理解することができる。（知識･理解）

３　単元について

教材の価値

児童は１学期に、たし算やひき算が用いられる場面での立式の仕方、和が 10 以下の１位数の計算の仕方を学習した。2 学期に入り、20 までの数の構成について「10 といくつ」という考えを基にして、「３つのかずのけいさん」では、３口の１位数同士の加減計算を通して、たし算･ひき算が用いられる場面の理解を深めてきた。

本単元では、その既習事項を活用しながら、繰り上がりのあるたし算の計算の仕方を学習する。たし算の意味の理解を深め、「10 の補数」に注目し、「10 のまとまり」を作って計算する良さを実感させて学習を深めていく。

研究テーマとの関連性

視点１　かかわり合う活動

①問題とのかかわり

・問題の情景図を提示し、問題そのものを児童とともに作り上げることによって、問題解決に主体的に取り組ませたい。

②友だちとのかかわり

・問題解決の手続きを話し合う中で、自分の考えを再認識したり、友だちの考えの良さに気づいたりする力を身につけさせたい。

③事象とのかかわり

・（１位数）＋（1 位数）の繰り上がりのあるたし算で、加数、被加数が変わっても計算できるきまりを見つけ活用させたい。

視点２　自己を拓く

・取り組みの姿勢を賞賛し、自信を持って問題解決に取り組ませたい。

・友だちの考えの良さを自分の考えに活かそうとする力を身につけさせたい。

視点３　豊かな表現力

・数図ブロックの操作を図に表したり、言葉や式で表したりして、操作→図→式を対応させて表現方法を高めていきたい。

・10 のまとまりを作るために、加数分解、被加数分解があることに気づき、場合に応じて使い分ける力を身につけさせたい。

４　子どもの姿

・問題をノートに書き、数図ブロックを操作したり、図や式をかいたりする活動に取り組んでいる。作業にかかる時間に個人差はあるが、活動には意欲的に取り組んでいる。新しいことを学習すると、自分から活用してみようとする。

・問題解決に意欲的に取り組もうとしている。練り上げ場面では、友だちの考えを聞こうとする姿勢が見られつつある。また、発表の途中でつまずいた友だちに替わって発表する姿も見られるようになった。（視点１）

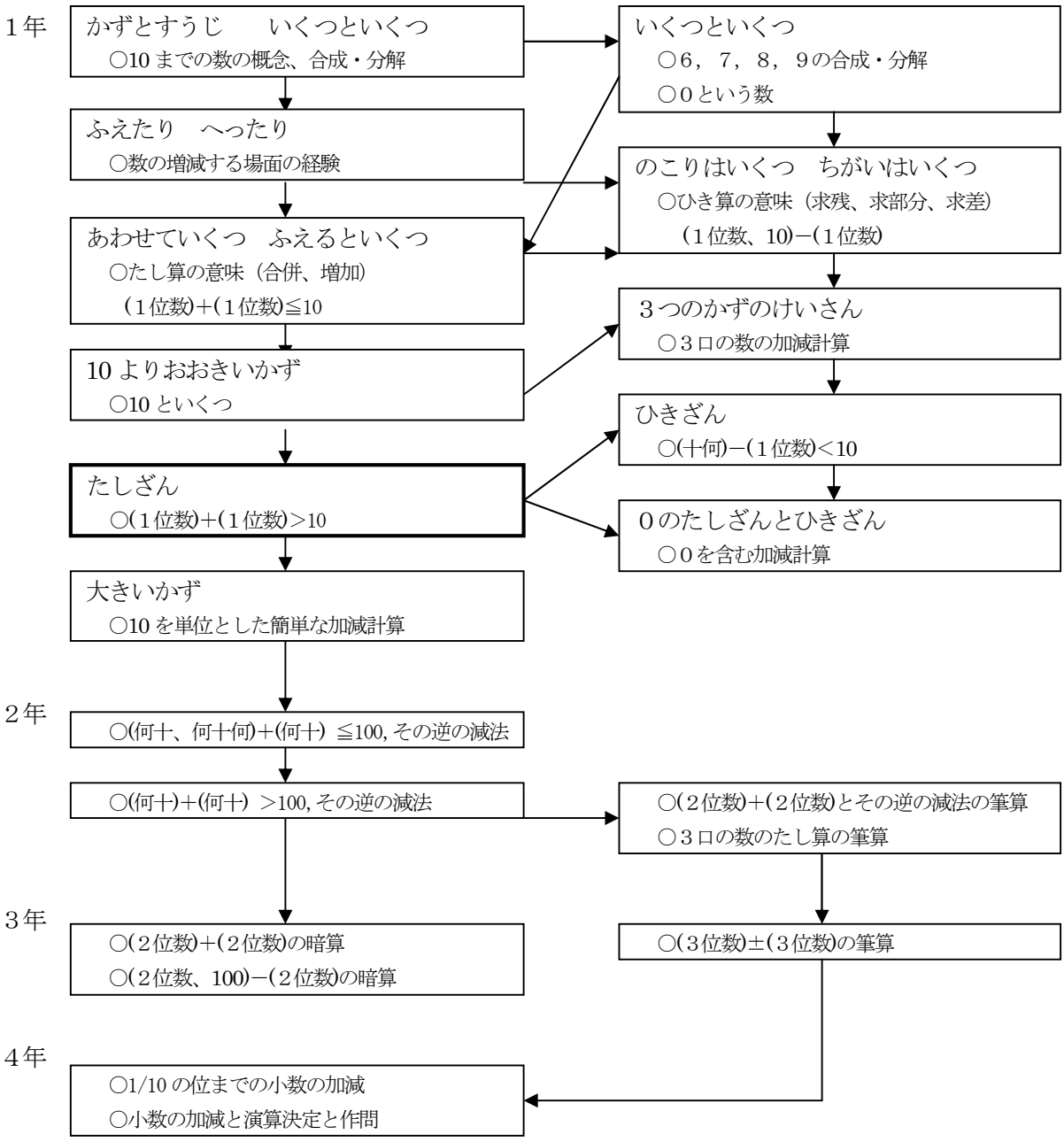
・前に出て一生懸命発表する友だちに賞賛の拍手を送ったり、よい考えに対して「いい考え。」と素直に認めたりすることができる。間違った考えに対しても、「間違っても大丈夫。」と認めることもできる。中には、「算数は楽しい。」と発する児童もいる。(視点 2)

・問題を作ったり、ノートに書いたりすることに意欲的に取り組んでいる。ブロック→図→式を対応させてノートにまとめることに少しずつ慣れてきた。友だちの前で発表することもできるようになってきた。個人差があるので、二人体制で対応している。(視点３)

5　単元の評価規準

算数への 関心･意欲･態度	数学的な考え方	数量や図形についての 表現･処理	数量や図形についての 知識･理解
・繰り上がりのあるたし算の計算に興味を持ち、計算の仕方を自ら考えようとする ・繰り上がりのあるたし算の計算を用いて身の回りの問題を解決しようとするなど進んで用いようとする。	・作業的、体験的な活動を通して、10 の補数を意識し、繰り上がりのあるたし算の計算の仕方を考える。	・(１位数)＋(１位数)の繰り上がりのあるたし算が確実にできる。 ・繰り上がりのあるたし算の場面を式に表したり、表された式をよんだりすることができる。	・(１位数)＋(１位数)の繰り上がりのあるたし算の計算の仕方を理解している。 ・繰り上がりのあるたし算の用いられる場合を理解している。

6　単元の系統について



7　指導計画

	学習内容	本　時　目　標	中心となる考え	問　　題	主たる算数的活動
1 本時	・操作による繰り上がりのあるたし算の仕方	・繰り上がりのあるたし算について、数図ブロックを操作したり、図、式に表したりすることを通して、計算方法を見つけることができる。	○数図ブロックを操作したり、図、式に表したりすることを通して、10 のまとまりを作ればよいことに気づき、加数分解や被加数分解を見つける。	くるまが８だいとまっています。５だいきました。 あわせてなんだいでしょう。	A：数えたしをして、解決している。 B：ブロック操作や図、式で解決しようとしている。 C：加数分解と被加数分解の２つのやり方を見つけている。
2	・操作による繰り上がりのあるたし算の仕方の理解	・繰り上がりのあるたし算について、数図ブロックを操作したり、図、式に表したりすることを通して、加数分解、被加数分解の仕方を理解し、どちらの方法でも計算することができる。	○数図ブロックを操作したり、図、式に表したりすることを通して、加数分解と被加数分解の計算の仕方を理解し、どちらの方法でも計算することができる。	いもうとはくりを６こ、にいさんは７こひろいました。 あわせるとなんこになりましたか。	A：自分の考えた計算方法で解決しようとする。 B：もう一方の計算方法で解決しようとする。 C：加数分解と被加数分解の計算の仕方を理解し、計算できる。
3	・加数分解のよさの理解	・被加数が６以上の時、10の補数に着目して被加数分解して計算することができる。	○被加数が９の時、９の補数は１になり、加数よりも1小さい数を10に足せば答えが求められることに気づくことができる。	あかいはなが９つ、きいろいはなが４つさいています。 あわせていくつさいていますか。	A：加数分解で解決している。 B：被加数が９の時、補数は１になり、被加数＋１で 10 のまとまりができることに気づいている。 C：被加数が９，８，７，６の場合で被加数に１，２，３，４，を足して 10 のまとまりを作ることを見つけている。
4	・被加数分解のよさの理解	・被加数が５以下の時、10の補数に着目して被加数分解して計算することができる。	○被加数と加数の数の大小に着目して、被加数が小さい場合は被加数分解をして計算することができる。	「４＋７」「７＋４」では同じ計算の仕方をしますか。	A：加数分解で解決している。 B：加数分解、被加数分解で解決している。 C：被加数分解の適する場面を理解し、加数分解と被加数分解を使い分けて、問題を解決しようとしている。
5 6 7 8	・たし算のカード	・たし算のカードを使って、繰り上がりのあるたし算を練習し、習熟する。			
9	・たしかめ道場				

８　本時の学習

①　本時目標

（１位数）＋（１位数）で繰り上がりのあるたし算について、数図ブロックを操作したり、図に表したりすることを通して、計算の方法を見つけることができる。

②　評価規準

（１）繰り上がりのあるたし算について、数図ブロックや図を用いて、計算方法を見つけることができる。（数学的な考え方）

（２）10 のまとまりを作って考えるよさに気づき、進んで計算の仕方を考えようとすることができる。（関心・意欲・態度）

③　準　備　　（教師）　問題の情景図、数図ブロック（掲示用）
　　（児童）　数図ブロック

④　学習過程

学習活動・支援（＊）と評価

１　問題場面を把握し、本時の学習課題をつかむ。　**〈視点１－①　問題とのかかわり〉**

○絵を見ながら、一緒に問題を作りましょう。

①さいしょにくるまが８だいありました。
②そこへ、５だいきました。

○この後にどんな問題が続きますか。
③あわせてなんだいでしょう。

くるまが８だいとまっていました。
そこへ５だいきました。
あわせてなんだいでしょう。

＊ノートのマス目に合うように問題を方眼黒板に書く。

○どんな式で答えが求められますか。
・８＋５です。

８＋５のこたえをブロックをつかってみつけよう。

２　８＋５の答えをブロックを使って見つける。　**〈視点１－①　問題とのかかわり〉**
〈視点３　豊かな表現力〉

○初めにあった車をピンクのブロックで、後から来た車を青のブロックに置き換えよう。

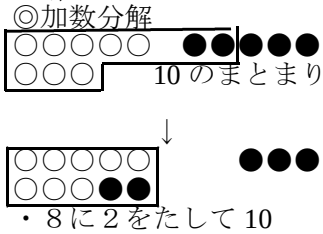
自力解決Ａ
◎数えたし
○○○○○○○○●●●●●
１２３４５６７８９ 10111213
・８と５をあわせて、１，２，３，４，５，６，７，８，９，10，11，12，13 とかぞえました。

○○○○○○○○●●●●●
８９ 10111213
・８と５をあわせて、８，９，10，11，12，13 とかぞえました。

＊ 13 個ってすぐわかるようにブロックを分けて並べてみよう。
○○○○○○○○○●●　●●●
10　111213
↓
○○○○○　●●●
○○○●●　111213
10

⇩

自力解決Ｂ－１
◎加数分解

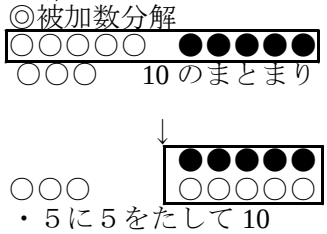


・８に２をたして 10
10 に３をたして 13

＊式に書いてみよう。
・８＋２＝10
10＋３＝13

＊ほかにも 10 のまとまりを作る方法はないかな。

自力解決Ｂ－２
◎被加数分解

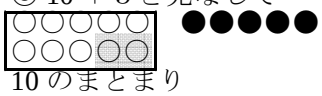


・５に５をたして 10
10 に３をたして 13

＊式に書いてみよう。
・５＋５＝10
10＋３＝13

＊ほかにも 10 のまとまりを作る方法はないかな。

自力解決Ｂ－３
◎ 10 ＋５と見なして



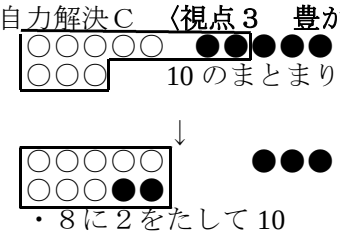
・10 あるとかんがえて、
10 と５をたして 15
８は 10 より２すくないから、
15 から２をひいて 13

＊式に書いてみよう。
・10＋５＝15
15－２＝13

＊ 10 のまとまりを作る方法はないかな。

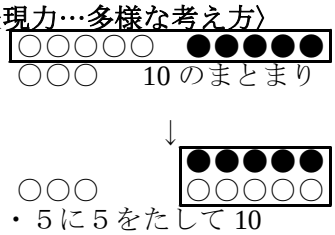
⇩

自力解決Ｃ　〈視点３　豊かな表現力…多様な考え方〉



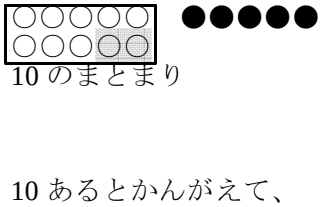
・８に２をたして 10
10 に３をたして 13

・８＋２＝10
10＋３＝13
・８＋２＋３＝13



・５に５をたして 10
10 に３をたして 13

・５＋５＝10
10＋３＝13
・５＋５＋３＝13



・10 あるとかんがえて、
10 と５をたして 15
８は 10 より２すくないから 15 から２をひいて 13

・10＋５＝15
15－２＝13
・10＋５－２＝13

＊３つの考え方から気づくことは何ですか。
・10 のまとまりをつくってかんがえています。

＊８＋７だったら、答えはいくつになるのかブロックを使って考えてみましょう。

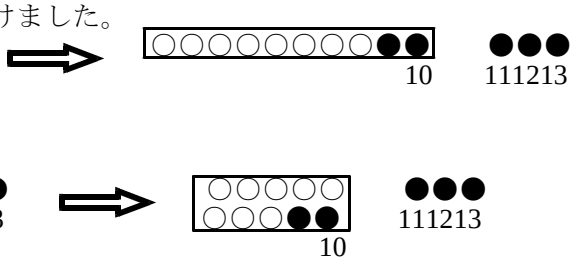
３　ブロック、図、式を対応させながら、８＋５の計算の仕方を話し合う。
〈視点１－②　友だちとのかかわり〉
〈視点２　自己を拓く〉

○８＋５の答えはいくつになりましたか。
・13 になりました。

○答えの 13 を見つけた方法をブロックを使って説明しましょう。

・１れつにならべて、10 と３にわけました。

○○○○○○○○○●●●●●
１ ２ ３ ４ ５ ６ ７ ８ ９ 10111213



・10 のまとまりをつくってかんがえました

○○○○○　●●●●●
○○○　　10 のまとまり

↓

○○○○○
○○○●●　●●●

・８＋２＝10　　10＋３＝13
・８＋２＋３＝13

・ほかのほうほうで 10 のまとまりをつくりました。

○○○○○　●●●●●
○○○　　10 のまとまり

↓

●●●●●
○○○　○○○○○

・５＋５＝10　　10＋３＝13
・５＋５＋３＝13

○ 10 のまとまりを作って考えると計算できますね。２つのやり方をみんなでブロックを使って確かめましょう。

【評価（１）　児童発表、児童活動】
・それぞれの考え方をみとめ、共有する。

４　評価問題をする。　　〈視点１－③　事象とのかかわり〉

○後から来た車の数が７台のとき、みんなで何台になるでしょう。

○○○○○　●●●●●
○○○　　●●　10 のまとまり

・８＋２=10　10＋５＝15
・８＋２＋５＝15

○○○○○　●●●●●
○○○　　●●　10 のまとまり

・３＋７＝10　10＋５＝15
・３＋７＋５＝15

○○○○○　●●●●●
○○○　　●●　10 のまとまり

・５＋５＝10　10＋３＋２＝15
・５＋５＋３＋２＝15

８＋７＝15

○８＋６，８＋８，８＋９の答えを 10 のまとまりを作って見つけましょう。

【評価（２）　児童活動】

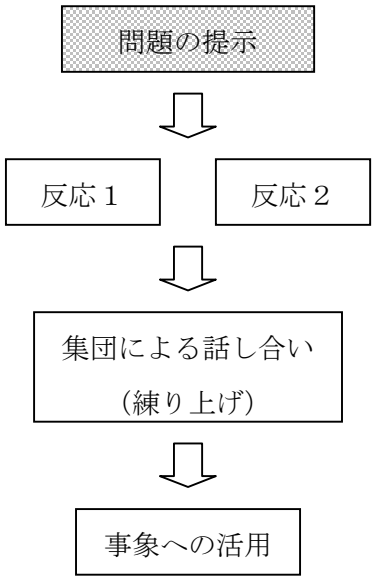
・ブロックを動かしながら、
６を２と４に分けて、
８＋２＝10
10 ＋４＝14　　と答えを見つける。

・一人ひとりの子どもが、「加数分解」、「被加数分解」「５と５で１０」の、どの考え方を用いているかを把握する。

実施したカリキュラム

算数「1年『たしざん』の授業」　2007.9.21

１．視点１：かかわり合う活動①
　－問題との関わり－



（１）実際の授業のモデル

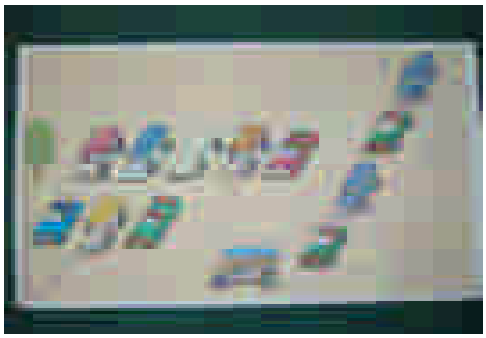
問題を子どもたちと一緒に作るために、問題の情景図を一度に提示するのではなく、二段階に分けて、提示した。

１枚目の情景図から「くるまが８だいとまっている。」こと、２枚目の情景図から「くるまが５だいきた。」ことを、子どもたちは見つけ出し、それぞれ発言していた。また、１枚目の情景図を見て、「あと２だいとまったら、ちょうど 10 だいになる。」と、解決の糸口につながる発言もあった。

この後にどんな問題が続くのか考えるとき、今までに学習したことを基にして、「あわせてなんだいでしょう。」「ぜんぶでなんだいになるでしょう。」などの意見が子どもたちから出てきた。

「くるまが８だいとまっています。」

⟶



「そこへ５だいきました。」

↓

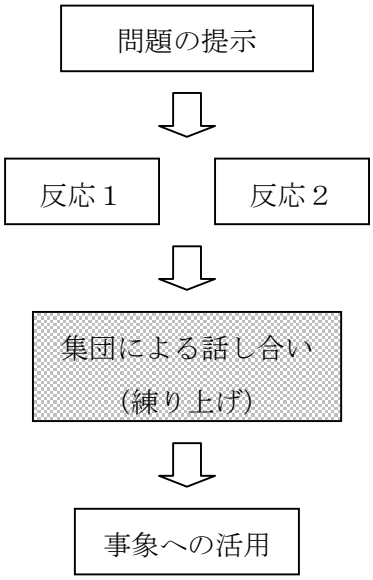
「あわせてなんだいですか。」

（２）問題の構成・把握とその工夫

問題を作るときには、演算決定につながるキーワードを子どもたちが見つけ、考えることができた。例えば、今回の場合は、車が５台来ることによって、元の数よりも増えることを理解して、たし算の演算決定につながる問題の続きを考えることができた。自分たちで問題を作ったことによって、問題場面が把握できており、問題解決に主体的に取り組むことができた。

問題を子どもたちと一緒に作っていくのと同時に、教師は問題を１文ずつ方眼黒板に書き、子どもたちも問題を１文ずつノートに書き写していった。１マス空けることやくっつきの「へ」に気をつけることなどを友だち同士で確認しながら視写していた。

２．視点１：かかわり合う活動②
－他の友だちとの関わり－



（１）実際の授業のモデル

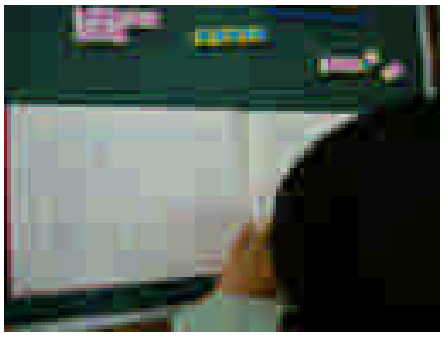
自力解決の場面で、数えたしによる答えの求め方と、10 のかたまりを作って求める方法（加数分解、被加数分解）によって、全員が 13 という答えを求めることができた。

練り上げの場面では、10 のかたまりを作って答えを求める方法を取り上げ、10 のまとまりを作って考えるよさに気づかせた。その際、ブロック操作、図、式を対応させて、１つ１つの考え方をみんなでつなぎ合わせることによって、８＋５の計算の仕方を考えることができた。

（２）算数的活動の展開とその工夫

子どもたちは自力解決の場面でブロックを以下のように並べることができた。

10 のかたまりを作る方法が２つ見つかり、まず被加数分解から取り上げた。並べたブロックをどのように動かして 10 のかたまりを作ったのか、考えた足跡が残るようにブロック操作と平行して図に表現していった。友だちのブロック操作を見て「すごい。」「いいかんがえ。」という言葉が自然に発せられた。被加数分解を行った児童が他にいなかったこともあり、自分の考えた方法とは違う方法に出合えたことを喜んでいた。

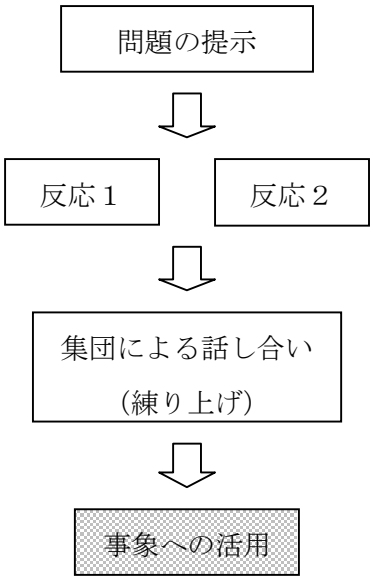


学級全体に「友だちのやり方でブロックを動かしてみよう。」と呼びかけ、考えを共有させることができた。その後、ブロック操作、図を基にして、計算の仕方を式で表すこともできた。

次に、加数分解を取り上げた。被加数分解と同じように、ブロック操作、図、式を対応させて考えた。この方法は何人もの子どもたちが見つけていたので、「同じ考えだ。」「一緒のやり方だ。」という声が子どもたちから発せられた。この場合も、学級全体に「友だちのやり方でブロックを動かしてみよう。」と呼びかけ、考えを共有させることができた。その後、ブロック操作、図を基にして、計算の仕方を式で表すこともできた。

加数分解、被加数分解の２つの考え方に出合うことによって、10 のかたまりを作って考えるよさに気づき、友だちの考えを共有することによって共に学ぶよさを体感することができた。

３．視点１：かかわり合う活動③
－日常事象との関わり－



（１）実際の授業のモデル

繰り上がりのあるたしざん「８＋５」の計算の仕方を考えるとき、加数分解、被加数分解を行い 10 のかたまりを作って計算すればよいことを見つけることができた。

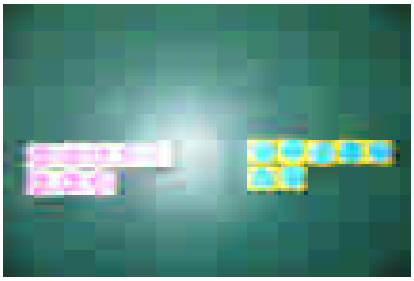
学習したことを基にして、「８＋７」の計算の仕方を子どもたち一人ひとりがブロックを操作することを通して、実際に活用する活動が展開できた。

子どもたちが自ら見つけ出した繰り上がりのある計算の仕方を活用することによって、そのよさを学級全体で共有することができた。

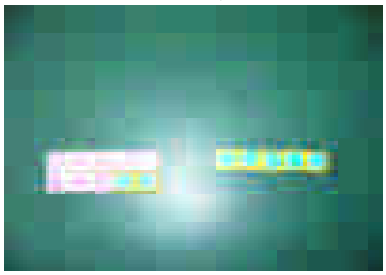
（２）算数的活動の展開とその工夫

練り上げ場面で、繰り上がりのあるたし算の計算の仕方をブロック操作を通して学級全体で共有する活動を取り入れたことによって、10 のかたまりを作って計算することのよさに気づくことができた。

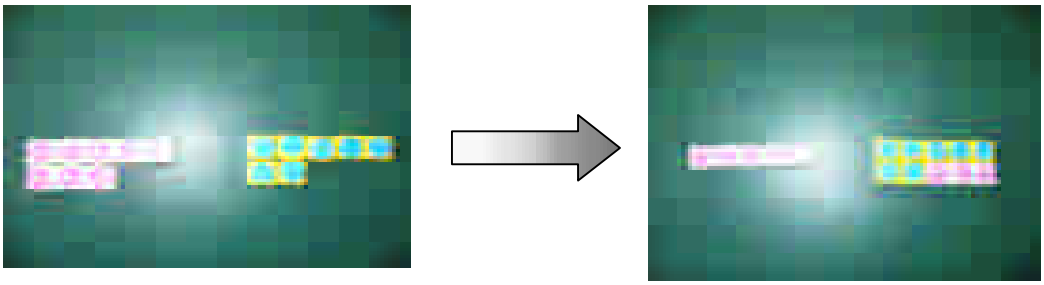
実際に、「10 のかたまりを作って計算する」ことが知識としてだけではなく、新たな問題に直面したときに活用できるかどうか確認するために、「８＋７」の問題を提示し、子どもたちにブロックを操作させる活動を仕組んだ。



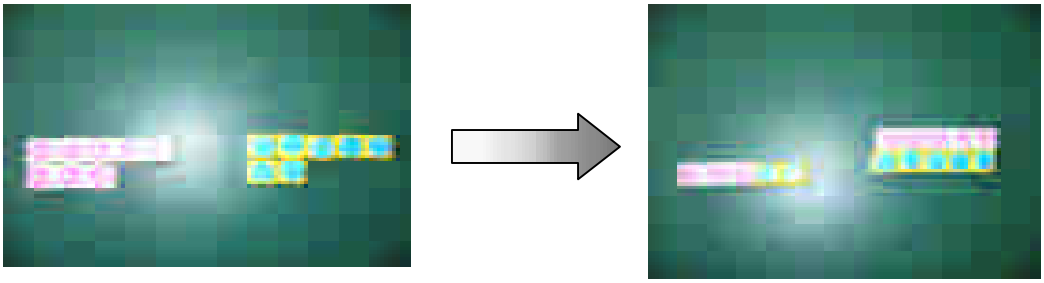
（加数分解）



（被加数分解）



（５と５で 10）



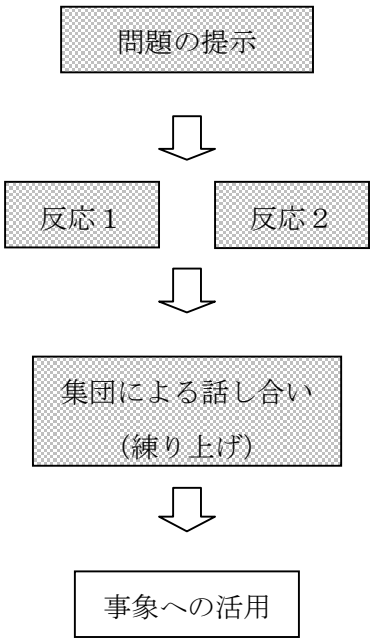
子どもたちは、10 のかたまりを作ることを意識していて、大半の子どもたちが加数分解を行い、10 のかたまりを作っていた。10 のかたまりの作り方は１つではないことに気づき、被加数分解や５のかたまりを２つ合わせるやり方で 10 のかたまりを作る子どもの姿も見られた。中には、自分で問題を作り、ブロックを操作して答えを見出そうとする子どもの姿も見られた。

このような子どもたちの姿から、学ぶよさ、わかる喜びが主体的な活動を生み出すことをみてとることができた。

４．視点２：自己を拓く

「自己を拓く」ことは、子どもたちの算数の授業の中においては、

・友達同士の関わる活動の中にその姿を求めることができる。
・友達同士の関わる表現の中にその姿を求めることができる。
・問題の構成や問題の解決の中にもその姿を求めることができる。



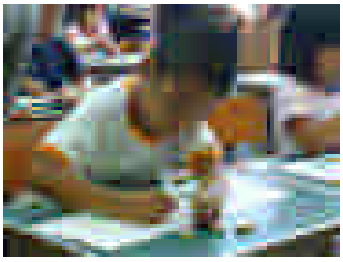
（１）実際の授業のモデル

①問題の構成・把握の場面

T1「今日も算数の問題をつくろう！」
と言う教師の発言に対して、
C1　やった～
C2　よし、がんばるぞ～　と、子どもたちは口々に言い出す。

問題文を写す中で、
C3　１マス空けますか？
C4　「そこへ」の「へ」は「え」ではないよ！　と、　友達に対して注意を促す。

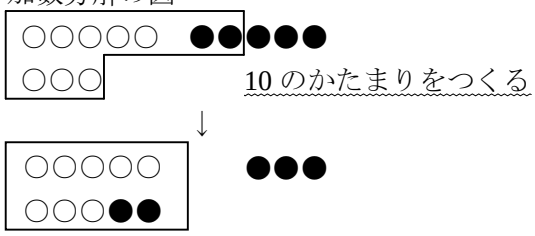
②自力解決の場面



前時までに身につけた絵や図の表現を生かし、
C5　絵の中に→を入れる子ども
C6　解き方をわかりやすく伝えようとする子ども
C7　一通りではなく、多様に計算の仕方を考える子ども

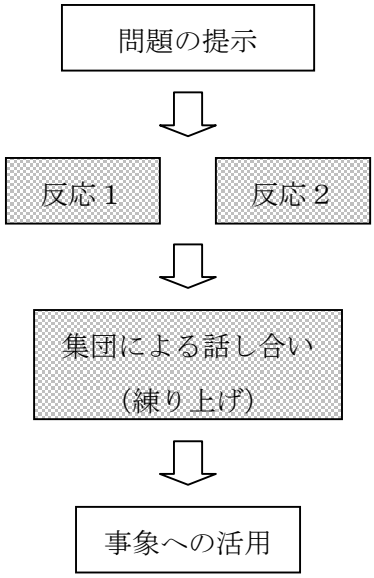
③練り上げの場面

S1　加数分解の図



この子どもの説明に対して、
S2「なぜ、5 台の中の 2 台を動かしたのですか？」と問いが続き、
S3「式に表すと、8+2=10　10+3=13 になります！」とよりよい表現を求め、
S4「２つの式を１つにもできるよ！」と言い出し、8+2+3=13 と１つの式に表していく集団の話し合いの中に、子どもたちの「自己を拓く」具体的な姿をみることができた。

５．視点３：豊かな表現



（１）実際の授業のモデル

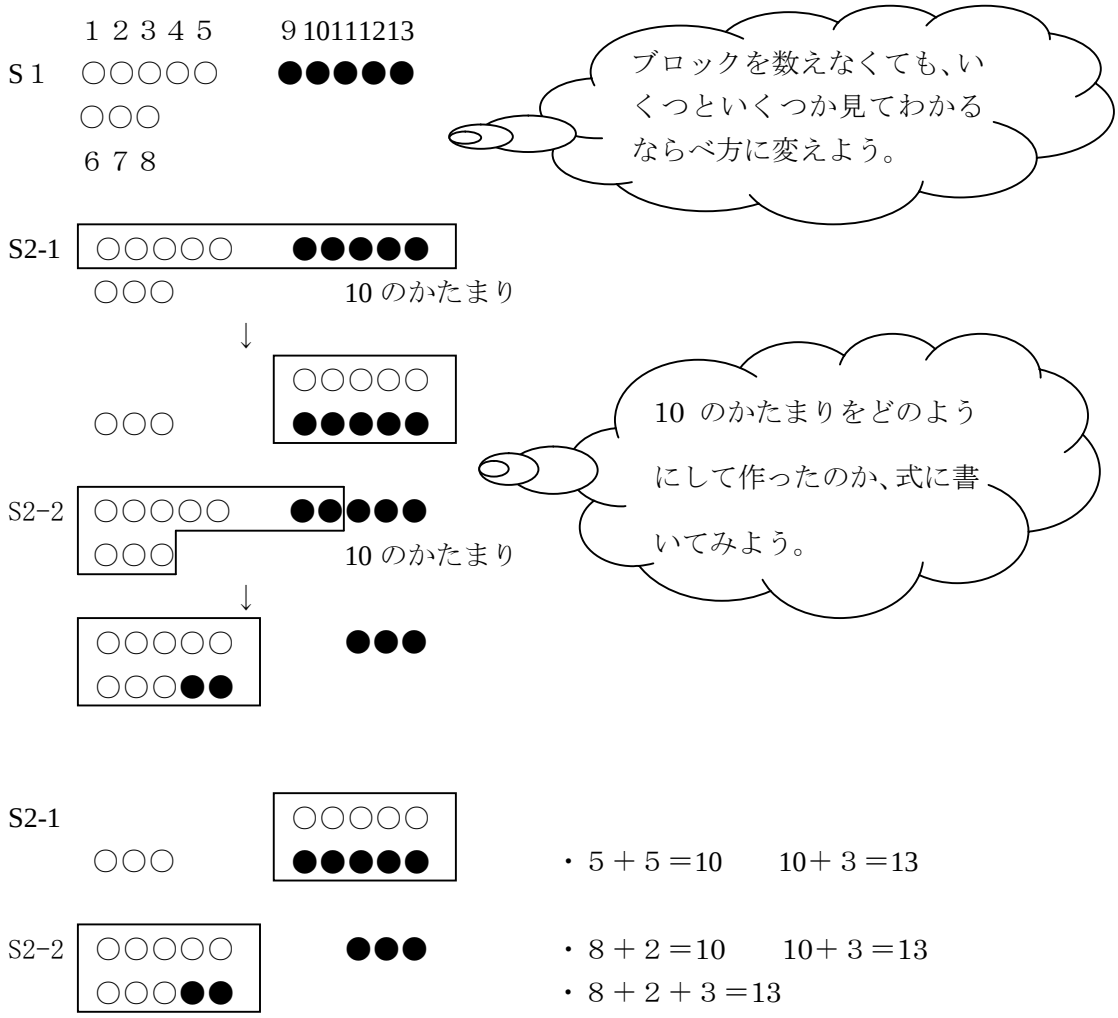
ブロックの操作、図、式化を対応させ、思考の抽象化を図った。

自力解決の場面では、ブロックを並べ、その図をノートに書き表すことができた。次に、図の中に10のかたまりをどのようにして作ったのか表現していた。操作と式を関連させ、計算の仕方を式で表現する子どももいた。

練り上げの場面では､学級全体でブロックの操作、図、式化を対応させながら話し合い、思考を高めることができた。

（２）算数的活動の展開とその工夫

自力解決の場面で以下のような活動の様相が見られた。



教師の支援によって、子どもたちの思考に変容がみられた。また、思考が中断した

ときは、前時までの学習で活用できることはないかノートを振り返り、学習の手だてを自分で見つけようとする子どもの姿が見られた。

練り上げの場面では、自力解決の場面で行った支援を発問として学級全体に投げかけた。かかわり合う活動でも述べたように、みんなで考えを出し合い、つなぎ合わせることによって、よりよい計算の仕方を作り上げていくことをねらいながら展開していった。

ブロックを操作したり図に表現したりしながら説明するとき、今までに学習したことを基にして考えたこと、前時までのノートを振り返り表現の仕方を考えたことなど、思考過程を自分の言葉で表現していた。また、式化する時は、友だちの式を見て、１つにまとめてかくことができることに気づき、みんなに伝え、よりよい考えを共有することができた。自力解決の場面で数えたしの考え方から加数分解、被加数分解の考え方に移行できなかった子どもが、練り上げの場面で友だちの考えに出合えたことによって加数分解、被加数分解の考え方を理解することができたといえる。

ブロック操作、図、式という算数的な表現に加えて、「なぜ」という問いに対して根拠を明らかにして説明することが算数の授業を展開していく中で大切となる。

基礎基本部会の取り組み

１　はじめに

基礎基本部会では、昨年度までの取り組みをもとに学習規律と生活習慣の基礎基本の徹底及び定着を図り、さらに学力向上の素地を高めていくことをねらいとし取り組むこととした。本校児童の実態として、忘れ物が多く学習用具が整わない、計算や漢字が定着していない、朝から元気がなく集中力が持続しない、落ち着きのない行動が見られるなどが挙げられた。まず、学習を支える土台としての基礎学力、学習に向かう態度を身につけることで、児童が自分自身の力を積み上げ向上していくことができると考えた。そのために、学校全体で取り組めるよう、学習面、生活面について各部で具体的な取り組みを考え、実践することとした。

２　取り組みの実際

①学習規律，②基礎学力の定着，③家庭生活，の３つの項目について，昨年度までの取り組みを継続しながら以下の４点を重点項目として取り組んだ。

①　学習規律

「学習用具を整えよう」

〇持ち物チェックアンケートの実施

鉛筆、下敷き、消しゴム、定規類など毎日の学習に必要なものがそろっているかをチェックさせた。徹底できるよう持ち物チェック週間を設け一週間に２～３回のアンケートを実施した。また、チェックアンケートに振り返りの記述欄を設け、準備ができていないものをいつどのように用意するのかなどを記述できるようにした。

②　基礎学力の定着

〇いちょうタイム

<table>
<tr><td>実施時間</td><td colspan="3">木曜日１限　　発表集会終了後２５分間</td></tr>
<tr><td rowspan="2">内容と
ねらい</td><td>視写
５分</td><td>統一の用紙に教材文を視写する。</td><td rowspan="2">・集中力の向上
・書字のスピード、正確性の向上
・計算力のスピード、正確性の向上</td></tr>
<tr><td>計算
１５分
(採点も含む)</td><td>１,２年　　計算１００問
３年以上　　１００ます計算</td></tr>
</table>

〇書取計算会

<table>
<tr><td>実施日</td><td>月一回（最終水曜日）</td><td rowspan="2">・日々の練習の成果を試す。
・結果を今後の取り組みに生かす。</td></tr>
<tr><td>内　容</td><td>漢字、計算２０問ずつ</td></tr>
</table>

今年度は、体育館で全校一斉に行うようにした。最後まで集中する、高学年の学習に向かう姿を感

じ取る、日々の練習への意欲を高めるなどを全校一斉実施の主なねらいとして取り組んだ。

③　家庭生活

「家庭生活を見直そう」

○すっきりモーニング大作戦

9時間睡眠を続けることを目標に、「就寝・起床時間」、「朝食をとったか」、「自分で起きたか」について、記録を一週間とる。実施後、睡眠ポイントラリーの結果で自己評価し、保護者からのコメントをもらう。今年度は、5月と10月に実施した。(2月にも実施予定)

○「食」を大切にしよう

学校栄養士と連携し、食育集会（年2回）を実施する。今年度は「いただきます」「ごちそうさま」の意味を通して、「食への感謝の心」をテーマに講話を行った。実施後、児童の感想を持ち帰らせ、指導内容を掲載した保健便りを元に家庭での話し合いを促す。児童の感想に対する保護者のコメントをもらう。

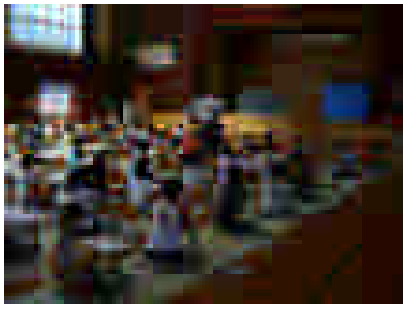
3　本年度の成果と課題

（1）成果

○持ち物チェックのアンケートを実施したことで、1年生から6年生まで学習用具として必要なものを児童・教員ともに共通認識することができた。

○持ち物チェック週間を設けたことで、チェックした次の日に購買で多くの児童が学習用具を購入するなど児童の学習準備への意識が高まった。

○視写の継続した取り組みから、日々の授業の中で問題や課題など板書をノートに書く時間が短縮されるようになった。



○全校一斉の書き取り計算会にしたことで、日々の練習（家庭学習）を意識する児童が増えてきた。また、教員もすべての学年、児童のおおよその実態を把握することができた。

○高学年の学習に向かう姿を参考にして、静かに集中して取り組む雰囲気が全校児童に広まった。

○すっきりモーニング大作戦では、約７０％の児童が9時間睡眠を達成することが出来た。自分で起きようと努力したり、時間を意識して生活していた児童が多いことが、児童自身や保護者のコメントからうかがえた。保護者からは、「意識づけのために度々実施して欲しい」という声も上がっている。

○学校栄養士による給食訪問（月２～３回）の効果も相まってか、目に見えて給食の残食が減ってきている。食事マナーについても、児童同士で注意しあって守ろうという姿も見られるようになった。

（2）課題

○学習用具として必要なものを日々そろえていくことは定着しつつあるが、不必要なもの（多色のペン）や適切ではないと思われる用具（キャラクターものなど）も学習を阻害する要因の１つになっていると考えられる。学習に向かうのに本当に必要なものだけを用意させたい。

○全校一斉の書き取り計算会を実施し、本校の児童全般的に鉛筆がきちんと持てていないことが分かった。最も基本的なことの１つであり全校での取り組みが必要である。

○継続して取り組んできたいちょうタイムにより視写や計算のスピードや正確性が向上してきたが、記録や意欲に頭打ちの感がある。内容について検討する必要がある。

○就寝時間の遅い児童については個別指導が必要であるが、本人への指導だけでは習慣化が難しい。家庭との連携をどのように図るかが課題である。

表現力育成部会の取り組み

1　はじめに

本校の児童の中には話すことにおいて、人前で堂々と意見が言えないという児童がいる。休み時間は元気に話しているのに、発表やスピーチ、感想を求められた時など、引っ込み思案になり、引いてしまう子がいる。話せない原因として、やる気がないわけでも、話すことがないわけでもなく、どのように話していいのか分からないといったことがあげられる。そこで、発表する側は教科での実践を進めていく中で解決できるが、感想を言う場合は、自分の思いを発表するので、先ほどの原因が考えられる。本年度は、どう言ったらいいのか、例を挙げて紹介をしたり、学年に応じた意見の出し方を参考にしたりしながら、自分の言葉で言えるように実践をしていくこととした。

そのために、表現力を発揮する場の設定と内容の工夫、学習で培った表現力を生かす場の設定や環境作り等について、昨年度までの実践を継続しながら取り組むこととした

2　取り組みの実際

〈発表集会〉

発表集会は、今までの取り組みを継続して行っている。しかし、内容については昨年度までの取り組みを生かしながら反省・改善して計画をした。活動時間は毎週木曜日のキリンタイムに全校児童が体育館（冬季は音楽室）に集まり実施した。

◇発表集会の流れ

・言葉遊び
　早口ことば　　詩の暗唱
・各学年の発表
・進行は発表する学年の担任がする。
・テーマ及び発表のめあての周知
・質問、感想、意見の発表
・司会の教師による感想及び評価

〇主な取り組みの内容

・発表者はめあてを意識した発表をする。

低学年・・・はっきりと大きな声で 中学年・・・速さを考えて聞く人によく分かるように 高学年・・・聞く相手を考えて表情豊かに

上記のような低、中、高学年のめあてを受けて、各学年が実態に応じて、目標を持たせて発表を行うようにした。

・発表は、学習の成果や児童一人ひとりの思いや考えを表現させるように意図的に内容を考え、自分を語る場となるようにした。

・聞く側は、めあてを発表前に知ることにより、めあてを意識して聞くことができるようにした。感想は、時間の都合で全員言うことはできないが、自分の意志を伝える意味で挙手はするようにした。自分と同じ感想が出たら、座るということもした。また、学年によっては、メモをとりながら共感的に聞くようなことにも取り組んだ。
・感想発表では、自分の考えを自分の言葉で言えるようにした。特に発表の内容、中身にそって感想が言えるようにした。誰もが、自分を語る場となるようにした。

〇発表集会ファイルの活用

発表学年の担任が事前に、テーマ、ねらい、発表者、発表の概要について記入し、会を進める。集会後、発表や感想について良かったことや指導した事柄、課題等を記入して、次回へとつなげていった。

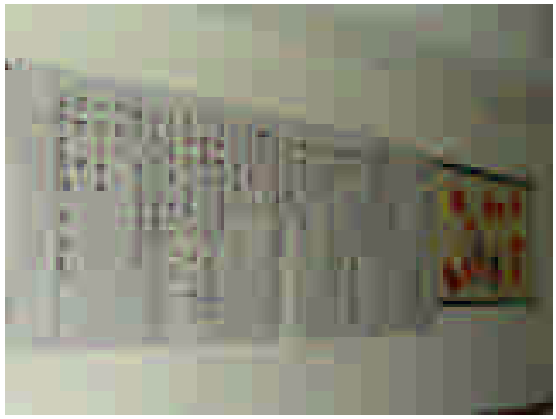
〇感想カードの掲示

発表集会の感想を全児童がカードに書き、掲示した。その場で感想が言えなかった児童も感想を書くことにより表現できるようにした。また、その感想をお互いに読み合うことにより、児童同士の交流もでき、児童相互の評価にも繋がった。

〈集会活動〉

◇毎月、隔週で、児童会と関連づけて委員会主催による集会活動を実施した。発表の場を増やして、相手に伝える力を養う場として活用した。発表内容は委員会にまかせ、活動時間は昼休憩と掃除時間を合わせた時間を活用した。

・調べたことを発表する。
・委員会活動に関連したクイズをする。
・全校でゲーム
・その他



〈言語に関する環境づくり〉

◇児童玄関に毎月、詩を掲示して楽しく読めるようにした。児童の中には暗唱して言える子もいた。

◇全校で唱えた早口言葉を掲示して、言葉のおもしろさを感じるのみでなく、リズムで読んだり口形を意識してはっきり読むようにしたりするなど工夫して読んでいた。全校で早口言葉を言う時には、大きな声で・はっきりと・大きな口をあける等のめあてをしっかり意識して取り組んだ。学年ごとに読み合ったり、声の大きさで競争したりと工夫をした。

◇学級図書の工夫

教科書に関連した図書を計画的に学級文庫に置くようにした。司書教諭と連携をとりながら、各図書館等と連絡をとり、揃えるようにした。

3　反省と考察

○取り組みの成果

週に１度ではあるが、キリンタイムとして朝の１０分間の取り組みを続けることにより、その時間が児童にとっては楽しい時間と感じられるようになったことは大きな成果であると思われる。それは、児童が自分たちの時間として意識してきたからだと思う。意欲・関心をもって進んで参加するようになった。その第一の要因は、発表者が自分の思いをもって集会に望むことができたからではなかろうか。自分の思いが自分の言葉で伝えられるという満足感も得られたと思う。自己を拓くという本校のねらいにそって児童も育っていると感じられた。また、今まで聞く側として、一方的に受け入れるのではなく、自分はどうかなどの共感的な聞き方もできるようになってきた。そして、関わり合う活動を通して、自分が聞く立場であっても、感想を言い合ったり、感想を読んだりし合いながら、豊かな表現へと結びついていったように思う。一人一人が自分の言葉で表現できるというめあてに進みつつある。

○今後の課題

自己を拓くということで、各教科でも取り組んでいるが、全体での課題、学級での課題、個人の課題を明確にし、指導の場や内容での取り組みをさらに計画していく必要がある。それにはまず、各部会や領域と連携を取りながら進めていく必要がある。そして、各教科や領域での取り組みが絡み合いながら一人ひとりに力をつけて行くことが大切である。

また、昨年度の反省を受けて、本年度の取り組みを行ってきたが、今後はさらに評価をしながら継続して研究を深めて行くことが重要である。

〈発表集会〉

全体では、発表に対する感想が多く出るようになったが、個人差がある。支援の仕方を考え全員が表現できる場となってほしい。短時間であるので、発表内容にもさらに工夫が必要である。発表するときの姿勢・声の大きさ等基本的なことをさらに児童に身につけさせたい。

〈環境づくり〉

学年に応じた言語環境を整理し、児童の目につくように工夫をしていきたい。また、話し合い等のできる時間の確保や、話型等を掲示し、それが身につくよう指導していきたい。自分の思いや感想が安心して言える雰囲気づくりにも今後留意していきたい。

〈集会活動〉

委員会が主催で独自の集会を計画し取り組んできたが、とてもユニーク活動があり、楽しく取り組めた。しかし、事前の準備等で時間を要することは課題である。また、児童で計画はできるが、どう進めたらいいのか等の児童主体の活動になるようにさらに継続して取り組ませていきたい。

評価研修部会の取り組み

1　はじめに

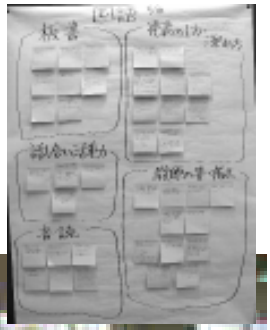
評価・研修部は以下の取り組みを重点に行った。
① 研究を推進していくための研修を充実させること
② 研究の日常化の推進
③ 研究の成果を立証するための評価やデータ収集・分析を行うこと

2　取り組みの実際

（1）校内研修の工夫改善

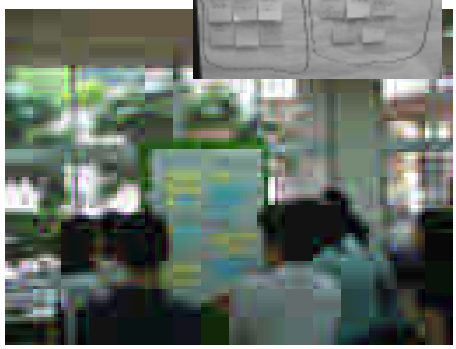
まず、一般研修では、主題設定の理由をふまえ、本校の実践のポイントが「かかわり合い活動」、「根拠を意識した説明活動（論理的思考力の育成）」、「先導教科（国語・算数）の独自性と共通性を意識した授業展開の工夫」であることを示し、共通理解した。

次に、授業研究会では、意見の偏りや議論が焦点化されにくい原因となっている「全体協議」の場面を見直し、「小グループ協議」を取り入れることにした。また、協議に先立って個々の教師がどのような視点で授業を参観していたかを確認できるよう、付箋を活用した。限られた時間枠の中で、話し合いを充実させるためにはどうしても焦点を絞った話し合いが必要になってくる。そのため、授業に際しては教科部としての視点を示すようにした。これが協議の場では、「協議の柱」になり議論を焦点化させていくポイントになると考えた。小グループ協議は、グループ内での話が全体には伝わりにくいため、小グループ協議の後には全体協議の場を設けるようにした。また、先導教科として２教科で実施しているため、各教科間での取り組みが見えにくいという課題があったため、平成 18 年度には交流授業研を、今年度は公開授業の推進を実施し研究の日常化に向けて取り組んだ。



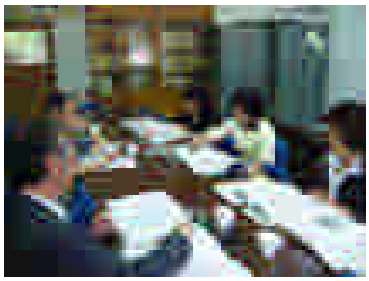
（授業研究会の改善について）

授業研では、多くの先生が指導案にメモ書きを行っている。そこには、率直な感想や意見、気づきが記されているはずである。その折々のメモを付箋に書き込み、全体で共有することで、参観した学習に対する意見や感想などの共通性や傾向を読み取ることができると考えた。また、「良かった・効果的だったと感じたもの」、「疑問や課題を感じたもの」のそれぞれについて色を変えることで、視覚的に認識しやすくなるよう工夫した。一般に、批判的な面には気づきやすく書きやすいものであるが、それだけでは改善の方向性が見えないので、批判的な意見を書く場合には必ず改善案を記入するようにした。



（小グループ協議について）

小グループ協議は、個々の教師の意見を交わすには非常に効果的だった。全体協議ではなかなか意見交換が活発に行えず、発言が偏ったり、無言の時間が流れたりすることがあったが、小グループでは、活発に意見発表や意見交換が行われた。グループ分けは、授業者が偏らないように配慮し、管理職、国語部・算数部の割合が均等になるように配慮して行った。



小グループの中では、活発に意見交換が行われても、全体には伝わらない。そのため、話し合いの概要を全体に説明する場を設けた。説明を焦点化し、短時間で伝えるために、話し合いのポイントを「小見出し」にして整理した。小グループ協議の報告の際、その「小見出し」をもとに説明をすることで、大切なことを落とさず、効率よく説明活動を行うことができた。また、小グループ協議や全体協議での話し合いをもとに反省が行えるよう、授業研の後にはできるだけ早い機会に全体研修会を行うように心がけた。

（研究の日常化について…公開授業）

本校は国語科と算数科を先導教科としているため、どうしても、お互いの研究内容が分かりにくいという課題があった。一般研修の中でも情報交換しているが、具体的なイメージが持つには限界があった。そのため、昨年度は、各教科部の研究に基づいた授業の参観を行った後、自分の所属教科部ではない教科（国語部なら、算数科）の授業を実際にやってみるという交流授業研という方法をとった。

本年度は研究の日常化を目指して、「公開授業研」を中心に行った。教務主任が事前に各学級の公開時間を調査し、一覧にまとめて提示した。それに基づき、同じ教科部会内で、あるいは違う教科間で授業を見合った。授業は見たものの、その感想や気づきを伝える場を確保することは難しいので、各学級に「感想ノート」を置き、それに書き込んでいくようにした。

行事等で忙しいことも多く取り組みの期間は限られたが、管理職も巻き込む形で日々の授業改善を意識した取り組みの１つとなった。

(研究の日常化について…実施したカリキュラムの作成)

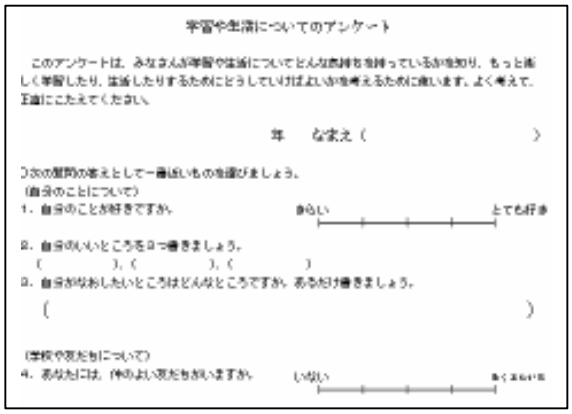
授業は教師の意図を反映して行われるが、必ずしも意図した通りに授業は展開しない。意図から外れた展開は、授業改善に向けた様々なヒントを提供してくれるものと考える。このような実践の足跡を残すため、月に２回程度授業記録を行い実施したカリキュラムとして積み上げてきた。これは、評価・研修部の単独の取り組みというものではないが、先の公開授業の取り組みとからめて実施されることも多く、研究の日常化に向けた取り組みの１つになっていた。実施したカリキュラムの作成は、各教科部で行っているため、詳細はそちらを参照していただきたい。

（２）児童の意識の変容（アンケート調査をもとにして）

（児童へのアンケート調査）

児童の実態把握及び、意識の変容を見取るためにアンケート調査を実施した。アンケート項目は県の基礎学力調査で実施された調査項目を参考にして作成した。

①自分自身について
②学校や友達について
③学習について
④学習の仕方、意見の言い方について
⑤家庭や地域について
⑥家庭での学習について



学習や生活についてのアンケート

このアンケートは、みなさんが学習や生活についてどんな意識を持っているかを知り、もっと楽しく学習したり、生活したりするためにどうしていけばよいかを考えるために使います。よく考えて、正直にこたえてください。

年　なまえ（　　）

○次の質問の答えとして一番近いものを選びましょう。

（自分のことについて）

1．自分のことが好きですか。　きらい　―　―　―　―　とても好き

2．自分のいいところを３つ書きましょう。

（　　），（　　），（　　）

3．自分がなおしたいところはどんなところですか。あるだけ書きましょう。

（　　）

（学校や友だちについて）

4．あなたには、仲のよい友だちがいますか。　いない　―　―　―　―　多くまたはいる

アンケートの対象は全校児童とし、低学年用と中・高学年用の２種類を作成した。

アンケート調査を比較検証するために昨年と今年の６月に実施したデータを比較してみると興味深い傾向が現れた。

まず、アンケートの質問内容を吟味し、研究のキーワードとの関連を考えてみた。

※　（　）の前の数字は、回答を点数化し５段階で評価した場合の全校平均である。
　　（　）内の数字は、平成 18 年度を 100%とした場合の平成 19 年の値である。

【かかわり合いに関連した項目】

・問 25.　少人数での話し合いやグループ活動が好きですか。	4.1（112%）
・問 26.　少人数で話し合う活動が学習中にありますか。	3.8（106%）

【自己を拓くに関連した項目】

・問 17.　授業中、分からないことを、素直に分からないと言えますか。	3.5（107%）
・問 23.　友だちの意見を聞いて考えが深まったり、新しい考えが浮かぶことがありますか。	3.9（106%）

【（豊かな）表現に関連した項目】

・問 19.　自分の意見をはっきり言うことができますか。	3.8（124%）
・問 20.　自分の考えや意見を人前で発表することは好きですか。	3.0（110%）
・問 21.　自分の意見はちゃんと理由付けしながら説明できますか。	3.4（118%）
・問 22.　自分は、説明することがうまい方だと思いますか。	2.5（106%）

【学習に対する意識に関連した項目】

・問 10.　国語の学習は楽しいですか。	3.5（108%）
・問 11.　算数の学習は楽しいですか。	3.7（111%）
・問 14.　分からないことは、分かるまでがんばって調べたり考えたりしますか。	3.8（104%）
・問 15.　授業中、勉強していることについてじっくり考えることがよくありますか。	3.8（106%）
・問 16.　授業中にまちがえたり、失敗したりすると冷やかされることがありますか。	2.5（ 92%）
・問 18.　授業に関係ない話や行動をして注意を受けたことがありますか。	2.9（ 89%）

【自尊感情に関連した項目】

・問１．自分のことが好きですか。	3.6（108%）
・問９．先生や友だちから大切にされていると思いますか。	3.7（112%）

これらの結果から、「かかわり合う活動」を児童は概ね好意的に受け入れており、表現に対する自信を深めていることが分かる。また、その中で自尊感情を高め、友だちと共に学ぶ良さを実感する児童が増えてきていることが分かる。以上のことから、「かかわり合う活動」を軸として「自己を拓き」「豊かに表現する」児童の姿をめざした本校の取り組みは、当初児童の課題としてとらえていた「自分で道を切り開き、困難を乗り越えてやり通そうとする力、友だちと協同しながら物事に取り組む力」を改善する方向に効果をあげていることが言えると考える。

3　成　果　と　課　題

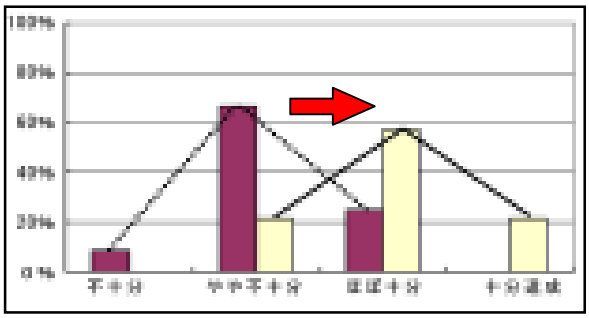
以上のような実践を行い、評価研修部としては、様々な工夫を取り入れて校内研修を行ってきた。平成 18 年度の学校教育評価の校内研修の項目を見ると、どの項目も満遍なく高い達成度を示しており、全体的に校内研修が充実してきたことが伺えた。

その中で、研修の計画と授業研究会についての項目を見てみたい。

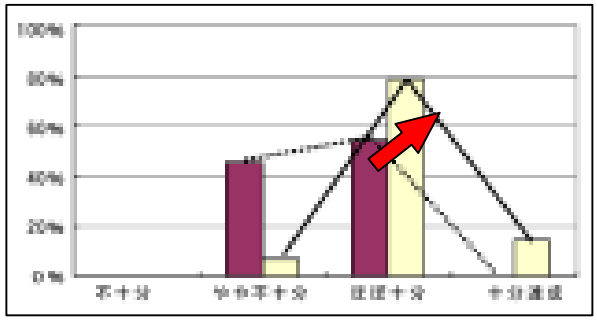
「研修計画の立案はよかったか」については、右のグラフのようであった。黒っぽいグラフが昨年度、白いグラフが今年度の評価である。(回答者数の割合を百分率で表している) この結果を見ると、研修の計画については、ほぼ十分あるいは十分達成を合わせた割合はほぼ 80%である。

また、「授業研究の持ち方は適切だったか」という問いについては、ほぼ十分、あるいは十分達成をあわせた割合は 90%を超えていた。

研修計画の立案



授業研究の持ち方



このことからみても、本年度の校内研修が充実したものになっていたことが確認できた。

一方、課題としては次のことがあげられる。

（研修全般について）

○ 限られている校内研修の時間枠

授業に限らず研修が必要なものは年々増える傾向にある。それらを全て校内研修に組み込んでいくことには無理がある。できるだけ精選、統合して少ない回数でより効果的に研修できるよう工夫する必要がある。

○ 授業改善の主体者は教師

研究は児童の実態や課題から入ることが多いが、児童の課題は多くの場合教師の指導力の課題と重なるのではないだろうか。児童の実態は教師自身の指導を反映しているという意識を自覚し、目の前の子ども達を何とかしていこうと工夫改善する教師の姿勢が具体的な児童の姿となって返ってくるものと考える。もちろん、児童の課題が全て教師の課題であると言うわけではないが、指導者としての客観的な視点や謙虚な姿勢は指導力向上の大切なポイントであると考える。

（児 童 の 変 容）

○ 本校児童の実態と研究の課題

「2　取り組みの実際」の中で述べたように、研究で目指す方向に向かって変容しつつある児童の姿がアンケート結果からも裏付けられた、本校の取り組みの方向に自信を持ちながらも、より質の高いかかわり合いの姿を求めるためには、「より質の高い課題づくり」が必要であると考える。どの教科にも共通する学びの資質・能力は高まりつつあると思うが、その教科でしっかり育てる力を一層意識し、より「確かな学力」を身につけさせていくための指導方法の工夫をさらに追究していく必要がある。